

カロリング期のカピトゥラリア
—同時代人は「カピトゥラリア」をどのように認識していたか—

津田拓郎

I. 研究史と問題の所在

カロリング期の重要史料であるカピトゥラリアに関しては、長年様々な議論が行われてきたが、「研究者間で異論が存在しないのは、見解が相違しているという事実についてのみである」¹というモルデクという言葉からも明らかなように、この史料類型については多くの問題が未解決のまま現在に至っている。しかし90年代までのほとんどの研究は、カピトゥラリアを「王の立法活動の産物」として法制史的に扱う点では一致していた。このような見方は、ガンズホーフによる「そのテキストが章に区分され、カロリング朝の君主達が立法や行政上の措置を公布するためにもちいた文書」²というカピトゥラリアの定義に基づいたものである。このような立場からは、カピトゥラリアの存在を「健全な統治システムの存在」と理解する方向性が表れる。現在用いられているボレティウス・クラウゼによる *Monumenta Germaniae Historica* (以下MGH) 版(1883~1897)に収録されたカピトゥラリア数から得られるイメージは、シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期前半をカロリング期の最盛期と考え、内戦開始以降(特に東フランク王国において)統治システムがプリミティヴなものへと「衰退」していったと考える伝統的な国制理解と大きな親和性を持っている。MGH版に収録されたカピトゥラリアの数を単純に比較するなら、シャルルマーニュ期後半からルイ敬虔帝期前半にかけての時期が、カピトゥラリア立法の最盛期であり、カロリング後期には西フランク王国を除いてほとんどカピトゥラリアが出されなくなったとのイメージが得られるのである。また、メロヴィング期やオットー朝期からはカロリング期のカピトゥラリアと比較可能な規模でこの種の史料が残されていないことを根拠に、カロリング朝が前後の時代と比較して「国家」としての性質をより強く打ち出した政体であったとの見解を提示する立場もしばしば見られる³。カピトゥラリアという史料類型は我々のカロリング期に対する理解に大きな影響を与え続けているといつて良い。

しかしこのようなイメージは大いに修正される必要がある。近年、カピトゥラリアを極度に法制史的観点から把握してきた伝統的な見方への批判とカピトゥラリアという史料類型の持つ多様性を強調する動きが現れているのである⁴。以下では、本報告の視角にとって重要な近年の研究動向を3点挙げ、問題の所在を明確にすることを試みたい。

¹ H. Mordek, *Karolingische Kapitularien*, In: *Studien zur fränkischen Herrschergesetzgebung*, 2000, S. 55.

² F. L. Ganshof, *Was waren die Kapitularien?*, Waimar, 1961, S. 13.

³ このような動向については、五十嵐修「国家なき国王支配? —中世初期国家研究の現状と課題—」『人文・社会科学論集』26、2009、pp. 49-59 に詳しい

⁴ すでにモルデクはカピトゥラリアの新しい定義として、「国王の、すなわちフランクの支配者に由来する、ほとんどが条項に分けられた諸々の規定や意見表明で、立法的、行政的、そして少なからず宗教・教育的な特質を持ったものであり、聖俗の貴頭の協力の下で公布されえたが、決していつでも彼らの協力の下で出されたわけではない」、との見解を述べていた。ここでは、「宗教・教育的特質」が強調されることで、カピトゥラリアを必ずしも王の

第一に挙げられるのは、カピトゥラリアと集会の関係性の問題である。伝統的にカピトゥラリアは聖俗貴顕の「同意」を得て王国集会で発布されたと考えられてきた。従来の研究においては、集会における聖俗貴顕の「同意」が義務的なものなのか、「同意」にカピトゥラリアの法的効力を生み出す効果があったのかなどが議論されてきた。このような議論が王の立法活動の産物としてカピトゥラリアを理解する立場から生じている事はいうまでもない。しかし、ペッセルは「集会のみがカピトゥラリア発布のための合法的かつ通常のコテキストであったとの想定を支持する同時代の証拠はない」とし、「国王巡察使 *missi dominici* 用のメモや集会のアジェンダだけでなく詳細な規定を含むカピトゥラリアも集会外で出され得た」ことを強調している⁵。また、一つのカピトゥラリアが複数の集会の議論の産物である事例や、集会外での議論も考慮した上で編集・抜粋が行われた後に初めてテキストが発布される事例の存在をも指摘している。このような議論を通じて、「法としてのカピトゥラリア」と「立法が行われる場としての集会」を無批判に前提・結合する立場が批判されているのである。

二つ目の重要な動向としては、カピトゥラリアという史料類型の多様性を強調する立場を挙げることが出来る。MGHの司教カピトゥラリアの版を編纂したポコルニーは、あるカピトゥラリアに見られる性質を無批判に他のカピトゥラリアにも当てはめる従来の態度を批判し、帰納的アプローチを提唱している⁶。カピトゥラリアの成立事情や機能に関して類型全体に当てはまる回答を得ることを目指すのではなく、我々が「カピトゥラリア」として認識しているテキスト群が、必ずしも一つの類型として同一の性質を持つものとして理解されうるものではないことを強く認識することが重要なのである。パツォルドはこの点に関して、「シャルルマーニュ、ルイ、そしてフランクの貴顕達は、自分たちが（我々中世研究者が用いている専門概念としての）カピトゥラリアを作っているという認識を持っていなかった」⁷とまで述べ、「カピトゥラリア」という類型そのものの存在にも疑問を呈するに至っている。彼の考えは、「これほど多様な性質を持つテキストを一つの広いカテゴリー、『カピトゥラリア』のもとで理解する事は確かに可能である。しかしその際には、このカテゴリーが一つの大まかな形態的指標のみによって定義されていることを自覚しなくてはならない。これらのテキストに共通していることは、個々の問題をリスト形式でまとめているという点のみなのである」⁸、との文言にも明確にあらわれている。また、これに関係して、一つのカピトゥラリア内部の条項ごとに向けられた対象が異なる事例が多数存在することも指摘されている。ペッセルは818/9年のカピトゥラリア群を対象に、テキストを受け取る立場にある司教、伯、巡察使や他の貴顕に直接向けられた条項と、彼らとその職務の中で配下の者たちに伝えるべき条項が一つのカピトゥラリアテキストの中に混在していることを明らかにしている⁹。ポコルニーも司教カピトゥラリアの史料論の巻において、一

立法活動の産物としてのみ捉える態度を相対化することが試みられているとあって良い。

⁵ C. Pössel, *Authors and recipients of Carolingian capitularies. 779-829*. In: R. Corradini, et. al (eds.), *Texts and Identities in the early Middle Ages*, Wien, 2006, p. 259

⁶ R. Pokorny, *Eine Brief-Instruktion aus dem Hofkreis Karls des Grossen an einen geistlichen Missus*. In: *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 52. 1996, S. 78f.

⁷ S. Patzold, *Normen im Buch*. In: *Frühmittelalterliche Studien* 41, 2007, S. 350

⁸ *Ibid.*, S. 349.

⁹ C. Pössel, *Authors and recipients of Carolingian capitularies*, pp. 259-265.

一つのカピトゥラリアが誰に向けられているか、そこに含まれる規定内容が誰に向けられているか(両者は必ずしも一致しない)を強く意識して司教カピトゥラリアの類型化を試みている¹⁰。このような知見から得られる印象は、長く考えられてきた「王の立法」や「勅令」としてのカピトゥラリア像を大きく動揺させるものであろう。

三点目に挙げられるのは、カピトゥラリアのもつ性質の変化の問題である。この点に関してマキタリックは、「カピトゥラリアの元々の機能やその生産段階と、後の時期におけるその利用・保管段階(カピトゥラリアはすべてこの形態で現存)の間の区別を明確にしなくてはならない」¹¹と述べている。カピトゥラリアはオリジナルが一切伝存しておらず、すべて何らかの写本中に書き写された形で伝えられているため、近年の欧米の研究は、カピトゥラリアを伝える写本の分析から、その受容・保管段階について多くのことを明らかにしてきた¹²。特に重要な知見として、「カピトゥラリアを収集した」と思われる写本の中には、「勅令」のごとき概観を持った詳細な内容を持つテキストのみならず、集会の議題リストや巡察使が用いたであろうメモ、さらには国王の出席が明記されていない教会会議決議など、異なった成立事情をもつテキストを、明確な区別を行うことなく並置するものが少なからず見られることが指摘されている。当然これらのテキストは、その成立段階においては異なった機能を期待されていたことが想定できるが、同時代人がこれらを写本に収録する段階においてすでに、テキストの様々な機能や成立状況の区別が困難な状況が生じていたと考えられるのである¹³。このような同時代の写本作成者の認識に大いに影響される形で、我々現代の研究者達もこれらのテキストの成立状況とそもそもの役割の差異を大きく考慮することなく、全てを「カピトゥラリア」として一括して捉えてしまっていたのであった。

このような研究動向を踏まえた上で本報告では、叙述史料(年代記や王の伝記)における決定の文字化への言及を調査することで、カピトゥラリアの「発布段階」の状況を分析する。このような作業を通じて、現在「カピトゥラリア」として一様な性質を持つものとして理解されている類型が、テキスト成立段階においてどのように同時代人に認識されていたのか、同時代人は「カピトゥラリア」をどのようなものとして認識していたのかの解明を試みる。その結果として、時代・地域ごとの「カピトゥラリア」伝存数の違いについて新たな知見を提示するとともに、各々の時代ごとの統治構造の変化についても何らかの洞察を得ることが最終目的とされる。対象とするテキストはボレティウス・クラウゼが「カピトゥラリア」としてMGH版に編纂しているものとウェルミングホーフ・ハルトマンによるMGHの教会会議決議の版に収録されているテキストの一部であるが、イタリアとヴェルダン条約以降の中部フランク王国の事例は検討対象に含めることができなかった。これらの「カピトゥラリア」自体の文言だけを分析するのではなく、それらの成立事情について、年代記・王の伝記でどのような叙述が行われているのかを分析するという本報告の視角は、これまでの研究

¹⁰ R. Pokorny (ed.), *Capitula episcoporum IV*, Hannover, 2005.

¹¹ R. McKitterick, *Charlemagne*, Cambridge – New York – Melbourne – Madrid – Cape Town – Singapore – Sao Paulo – Delhi, 2008, p. 232

¹² H. Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta. Überlieferung und Traditionszusammenhang der fränkischen Herrschererlasse*, München, 1995.

¹³ G. Schmitz, *Die Kapitulariensammlung des Ansegis*, 1996 Hannover, S. 25

において見落とされていたものである。なお、対象となる事例は集会でなされた決定を文字化したことへの言及一般であり、*capitula/capitulare*等の語のみを対象としたわけではないことをことわっておく。

II. 叙述史料におけるカピトゥラリアの文字化への言及

今回調査したカロリング期の年代記・王の伝記において、カピトゥラリアの文字化への言及が見られる事例は3つのカテゴリーに分ける事が出来る。紙幅の関係上ここでは全体の概観のみをまとめておくこととする。

第一のカテゴリーは教会関係の決定を文字化したことが記述されている事例であり、シャルルマーニュ時代に関して1例(813年アーヘン)、ルイ敬虔帝時代に1例(816年アーヘン)、東フランク王国3例(852年マインツ、868年ヴォルムス、895年トリブル)、西フランク王国3例(853年キエルジー、853年ソワソン、876年ポンティオン)が確認できた。これらはすべて、国王が開催を命じた教会会議の決議を文字化したものとして描かれている。ここに含まれるテキストの一部は、「カピトゥラリアではない」と見なされてボレティウス・クラウゼ版に収録されておらず、MGHの教会会議決議の版でのみ参照できる状況となっているが、本報告では叙述史料において国王主導のもと開催された教会会議の決定が文字化された事例として、一括して扱う事とした。

第二のカテゴリーとして、部族法典附加勅令や*lex*とみなされるべき規定を文字で記録させた事が記述されている事例が挙げられる。シャルルマーニュ期1例(802/3年アーヘン)、ルイ敬虔帝期1例(818/9年アーヘン)、西フランク王国2例(864年ピトル、873年キエルジー)が確認でき、東フランク王国に関してはこの種の事例は検出されなかった。

第三のカテゴリーは、王国分割・王位継承・同盟締結時に文書が作成されたことへの言及である。シャルルマーニュ期1例(806年ティヨンヴィル)、ルイ敬虔帝期2例(821年ネイメヘン、838年ネイメヘン)、複数の王の会合・同盟4例(843年ヴェルダン、851年メルセン、862年サヴォニエ、870年メルセン)、東フランク王国2例(876年リース、879年バイエルン)、西フランク王国3例(869年メッス、877年キエルジー、877年コンピエーニュ)を確認できた。

さて、叙述史料においてカピトゥラリアの文字化が述べられる事例は上でまとめた3つのカテゴリーのもののみであった。そして、これらの事例はすべて、集会において決定が文字化されたものとして叙述されている。このような事例は、伝統的にイメージされてきた「集会で聖俗貴顕の同意を得て王が発布する勅令」というイメージにある程度合致している。もちろん、これらの事例においてカピトゥラリアが「法」として認識されていると断定することは慎むべきであろう。しかし少なくともこれら叙述史料で明確に文字化が言及される事例は、決定を文字化して確定版のテキストを作成・伝播させる試みが行われたものとして評価することが可能であると思われる。

また、ここにまとめられた情報だけを見る限り、シャルルマーニュ期、ルイ期、カロリング後期の東西フランク王国における文書慣行の違いがほとんど検出されない点も重要である。「カピトゥラリア立法の最盛期としてのシャルルマーニュ期後半～ルイ敬虔帝期前半」、「カピトゥラリア立法が消滅する東フランク王国」というMGH版に収録されているテキストの数から得られるイメージは、叙述史料から得られる情報とは食い違っているのである。それでは叙述史料にあらわれないカピトゥラリアはどのようなものなのだろうか。

シャルルマーニュ期とルイ敬虔帝期に関しては、上で挙げた事例以外にも「文字による確定版」を作成・伝播させる試みが存在した事を思わせる証拠が残されている。例えば789年の『一般訓令 *Admonitio generalis*』や825年(?)のルイ敬虔帝による『王国の諸身分への訓戒 *Admonitio ad omnes regni ordines*』は、その伝存数や形式の点から明らかに「確定版テキスト」の作成・伝播が試みられた事例とあって良い。しかし叙述史料は789年や825年にそのような試みが行われたことには一切言及していない。これらのテキストは宮廷の比較的小規模な集団の中で成立したことが想定されており、それゆえに叙述史料で言及されていないのであろう。また、特にシャルルマーニュ期からは、このような小規模な集団の中で成立したと思われる巡察使宛のカピトゥラリアが多数残されていることも指摘できる。

シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期からは、これまでに言及してきた事例以外にも多くの「カピトゥラリア」が伝えられている。ここではそれらのテキストを一つ一つ分析することは出来ないが、そこに含まれるのは決定の在地への伝達の際に補助的に用いられた覚書、集会の議題、集会の議論の中で生まれたメモ、議論の際に参照された資料の抜き書きなど、多様な成立事情と機能を持つテキスト群である。このようなテキスト群が同時代に写本に収録される段階ですでに、そもそもの成立事情や機能の区別が困難な状況が生じていたと考える事が出来る。そしてその段階になると、司教カピトゥラリアや教会会議決議とこれら様々な種類の「カピトゥラリア」の間の区別も困難になっていた。個々の写本作成者ごとに、収録するテキストを選別する際の基準となるカピトゥラリア認識が存在していた可能性はあるが、それが写本作成者ごとに異なっただけでなく、彼ら自身どのテキストが自身の定義する「カピトゥラリア」にあたるのかを必ずしも十分に見分けられない状況におかれていたのである。このような形でわれわれに伝えられた「カピトゥラリア写本」が、「カピトゥラリアとは何か」を考える際のわれわれのこれまでの思考を大きく規定していた事実を認めることが重要である。「カピトゥラリア立法の最盛期」とされてきたこの時期のテキストの大部分は、「文字による確定版の作成・伝播」が試みられた事例ではなく、議論や規定の伝達の際に補助的に用いられたものであったと考えられる。

「カピトゥラリア立法が消滅した」時代とされてきた東フランク王国に関しても、上述のごとく叙述史料にはいくつかの「確定版テキストの作成・伝播」の試みの事例があらわれている。教会関係の決定や、王国分割・王国の継承といった事例においては決定を文字の形で確定させるという点においては、シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期の慣行が、東フランク王国においても継続していたと考えて良い。他方で、カロリング初期・盛期と異なり、在地への伝達の際に補助的に用いられた覚書、集会の議題、集会の議論の中で生まれたメモ、議論の際に参照された資料の抜き書きなどのテキストは東フランク王国からは一切残されていない。この点に関しては伝来の偶然の問題もあり、確定的な評価を下すことは困難であるが¹⁴、この分野においては文書慣行において一定の変化が存在した事を想定できると思われる。

¹⁴ 東フランク王国においては、文字の利用の一般的衰退が長く想定されてきたが、近年ではそのような見解の見直しが行われている、R. Deutinger, *Staatlichkeit im Reich der Ottonen*, In: W. Pohl und V. Wieser (eds.), *Staatlichkeit im Reich der Ottonen*, Wien, 2009, S. 139-142. なお、847年マインツ教会会議からも決議文書が残されているものの、フルダ年代記では教会会議の開催にのみ言及があり、規定の文字化については述べられていない。

西フランク王国に関しては、叙述史料にあらわれないカピトゥラリアに関して、シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期とは異なった状況が生じている。856年の一連の巡察使宛カピトゥラリアの事例を例外として、ボレティウス・クラウゼ版に含まれるほぼすべてのテキストに、集会で出されたことが明記されているのである。そこに含まれるのは、なんらかの集会で出された巡察使カピトゥラリア、集会におけるスピーチ、そして教会会議決議である。シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期に見られた、小規模の集団内で作成されたと思われるカピトゥラリアの事例は856年のものを除くと全く見られない。この点において、「カピトゥラリアの伝統が唯一維持された」とされる西フランク王国における慣行は、シャルルマーニュ期のものとは大きく異なっていた点を確認できる。

また、西フランク王国においては、ヒンクマールによって半公式のカピトゥラリア蒐集が作成されていたことも重要である¹⁵。シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期には見られなかった、「...年に国王陛下が...で規定したごとくに」という、過去のカピトゥラリアに明確に言及する事例がシャルル禿頭王の元で初めて現れることは、宮廷でこの種の写本が用いられていたこと、宮廷内にも「何がカピトゥラリアで何がカピトゥラリアでないのか」に関する一定の認識があらわれていたことを想定させる。しかしながら忘れてはならないことは、叙述史料にあらわれる情報のみを見る限り、シャルルマーニュ期・ルイ敬虔帝期・東フランク王国と、西フランク王国における状況に大きな違いは見られないという点である。発布段階において(少なくとも叙述史料執筆者によって)「文字による確定版の作成・伝播」の試みが行われた事例として認識されているものの数は大きく変化していないのである。ヒンクマールの写本にはそのようなカピトゥラリアのみならず、巡察使宛のカピトゥラリアや集会でのスピーチ、教会会議決議も明確な区別なく並置されている。ヒンクマールが意図的にこのような蒐集方法を採用したのかどうかについてはさらなる検討が必要であろうが、確かなことは、こうして写本に収録された後は、そもそものテキストの成立事情や機能に関わらず、それらがすべて同類型のテキストのごとくに認識されるようになったという事実である。

III. 結論

カピトゥラリア研究の歴史において現代の研究者達は、自分自身のカピトゥラリアの定義を設定した上で、一つ一つのテキストがカピトゥラリアと呼ぶに値するものなのかどうかを判断することを試みてきた。その際にはしばしば、テキスト中の情報の欠落ゆえに、判断が困難な事例があらわれている。このような状況はすでに、カロリング期の同時代人が「カピトゥラリア」を写本に収録する段階、またはそのようにして作成された写本を利用する段階においても存在していたのである。

¹⁵ J. Nelson, *Legislation and Consensus in the reign of Charles the Bald*, In: Eadem, *Politics and Ritual in early medieval Europe*, London, 1986, pp. 91-116.

IV. 参考文献

史料

R. Rau (ed.), *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte I*, Darmstadt, 1968

Idem (ed.), *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte II*, Darmstadt, 1969

Idem (ed.), *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte III*, Darmstadt, 1969

Monumenta Germaniae Historica

A. Boretius (ed.), *Capitula regum Francorum I*, Hannover, 1883

A. Boretius and V. Krause (eds.), *Capitularia regum Francorum II*, Hannover, 1897

G. Schmitz (ed.), *Die Kapitulariensammlung des Ansegis*, Hannover, 1996

A. Werminghoff (ed.), *Concilia II, Concilia aevi Karolini 1 und 2*, Hannover – Leipzig, 1906-1908

W. Hartmann (ed.), *Concilia III, Die Konzilien der karolingischen Teilreiche 843-859*, Hannover, 1984

Idem (ed.), *Concilia IV, Die Konzilien der karolingischen Teilreiche 860-874*, Hannover, 1998

P. Brommer (ed.), *Capitula episcoporum I*, Hannover, 1984

R. Pokorny and M. Stratmann (eds.), *Capitula episcoporum II*, Hannover, 1995

R. Pokorny (ed.), *Capitula episcoporum III*, Hannover, 1995

Idem (ed.), *Capitula episcoporum IV*, Hannover, 2005

G. H. Pertz (ed.), *Scriptorum I*, Hannover, 1826

Idem (ed.), *Scriptorum II*, Hannover, 1829

J. M. Lappenberg (ed.), *Scriptorum XVI*, Hannover, 1859

F. Kurze (ed.), *Annales regni Francorum, Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 6*, Hannover, 1889

B. von Simson (ed.), *Annales mettensis priores, Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 10*, Hannover, 1905

Idem (ed.), *Annales Xantenses et Annales Vedastini, Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 12*, Hannover, 1909

E. Tremp (ed.), *Thegan, Die Taten Kaiser Ludwigs (Gesta Hludowici imperatoris). Astronomus, Das Leben Kaiser Ludwigs (Vita Hludowici imperatoris), Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 64*, Hannover, 1995

T. Gross and R. Schieffer (eds.), *Hincmarus De ordine palatii. Fontes iuris germanici antiqui in usum scholarum separatim editi III*, Hannover, 1980

研究書・研究論文(欧文)

- S. Airlie, 'Talking Heads: Assemblies in Early Medieval Germany', in P. S. Barnwell and M. Mostert (eds.), *Political Assemblies in the Earlier Middle Ages*, Turnhout, 2003, pp. 29-46
- H. T. Anton, 'Synoden, Teilreichepiskopat und die Herausbildung Lotharingens (859-870)', G. Jenal (ed.), *Herrschaft, Kirche, Kultur. Beiträge zur Geschichte des Mittelalters. Festschrift für Friedlich Prinz zu seinem 65. Geburtstag*, Stuttgart, 1993, pp. 83-124
- T. Bauer, 'Kontinuität und Wandel synodaler Praxis nach der Reichsteilung von Verdun', *Annuaire d'histoire conciliaire* 23, 1991
- B. Bigott, *Ludwig der Deutsche und die Reichskirche im Ostfränkischen Reich (826-876)*, Husum, 2002
- J. F. Böhmer and E. Mühlbacher (eds.), *Regesta Imperii I. Karolinger: Regesten 751-918(924)*, Innsbruck, 1908
- E. Boshof, *Ludwig der Fromme*, Darmstadt, 1996
- P. Brommer, *Capitula episcoporum: die bischöflichen Kapitularien des 9. und 10. Jahrhunderts*, Turnhout, 1985
- T. M. Buck, *Admonitio und Praedicatio: Zur religiös-pastoralen Dimension von Kapitularien und kapitulariennahen Texten (507-814)*, Frankfurt am Main, 1997
- A. Bühler, 'Capitularia Relecta: Studien zur Entstehung und Überlieferung der Kapitularien Karls des Großen und Ludwigs des Frommen', *Archiv für Diplomatik Schriftgeschichte, Sigel- und Wappenkunde* 32, 1986, pp. 305-501
- P. Campbell, 'Die Kapitularien. Entstehung und Bedeutung', K. Kroeschell et al. (eds.), *Funktion und Form. Quellen- und Methodenprobleme der mittelalterlichen Rechtsgeschichte*, Berlin, 1996, pp. 23-38
- C. de Clercq, *La législation religieuse franque. De Clovis à Charlemagne*, Louvain, 1936
- Idem, *La législation religieuse franque. De Louis le Pieux à la fin du 9^e siècle*, Antwerp, 1958
- R. Collins, 'The Reviser Revisited: Another Look at the Alternative Version of the *Annales Regni Francorum*', A. C. Murray (ed.), *After Rome's Fall: Narrators and Sources of Early Medieval History*, Toronto, 1998, pp. 191-213
- J. Davis, 'A Pattern for Power: Charlemagne's Delegation of Judicial Responsibilities, in: Eadem and M. McCormick (eds.) *The long morning of medieval Europe: new directions in early medieval studies*, Aldershot, 2008, pp. 235-246
- P. Depreux, 'L'expression «statum est a domno rege et sancta synodo» annonçant certaines dispositions du capitulaire de francfort (794)', R. Berndt (ed.), *Das Frankfurter Kozil von 794*, Mainz, 1997, pp. 81-101
- R. Deutinger, *Königsherrschaft im Ostfränkischen Reich. Eine pragmatische Verfassungsgeschichte der späten Karolingerzeit*, Ostfildern, 2006
- Idem, 'Staatlichkeit im Reich der Ottonen', W. Pohl et. al (eds.), *Der frühmittelalterliche Staat-Europäische Perspektiven*, Wien, 2009, pp. 133-144
- M. de Jong, 'Charlemagne's church, J. Story (ed.), *Charlemagne. Empire and society*, Manchester and New York, 2005, pp. 103-135

- Eadem, 'Ecclesia and the early medieval polity', S. Airlie, W. Pohl and H. Reimitz (eds.) *Staat im frühen Mittelalter*, Wien, 2006, pp. 113-132
- Eadem, 'The state of the church: *ecclesia* and early medieval state formation', W. Pohl et. al (eds.), *Der frühmittelalterliche Staat-Europäische Perspektiven*, Wien, 2009, pp. 241-254
- K. A. Eckhardt, *Die Gesetze des Karolingerreiches. 714-911*, Weimar, 1934
- W. A. Eckhardt, 'Die Capitularia missorum specialia von 802', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 12, 1956, pp. 498-516
- J. Ehlers, 'Strukturen früher Staatlichkeit. West- und Ostfrankenreich im Vergleich (9./10. Jahrhundert)', W. Pohl et. al (eds.), *Der frühmittelalterliche Staat-Europäische Perspektiven*, Wien, 2009, pp.
- D. Eichler, *Fränkische Reichsversammlungen unter Ludwig dem Frommen*, Hannover, 2007
- R. Étaix, 'Manuel de Pastorale de l'Époque Carolingienne', *Revue Bénédictine* 91, 1981, pp. 105-130
- I. Fees (ed.), *Die Regesten des Westfrankenreichs und Aquitaniens. I Karl der Kahle 840(823)-877*. Lfg. 1(840/823-848), Köln – Weimar – Eiwun, 2006.
- F. J. Felten, 'Konzilsakten als Quellen für die Gesellschaftsgeschichte des 9. Jahrhunderts', G. Jenal (ed.), *Herrschaft, Kirche, Kultur. Beiträge zur Geschichte des Mittelalters. Festschrift für Friedlich Prinz zu seinem 65. Geburtstag*, Stuttgart, 1993, pp. 177-201
- F. L. Ganshof, *Was waren die Kapitularien?*, Weimar, 1961
- M. T. Gibson and J. Nelson (eds.), *Charles the Bald: court and kingdom*, Aldershot, 1990
- P. Godman and R. Collins (eds.), *Charlemagne's Heir: New Perspectives on the Reign of Louis the Pious*, Oxford, 1990
- J. E. Goldberg, *Struggle for Empire: kingship and conflict under Louis the German. 817-876*, New York, 2006
- D. Hägermann, 'Zur Entstehung der Kapitularien', W. Schlögl et al. (eds.), *Grundwissenschaften und Geschichte. Festschrift für Peter Acht*, Kallmünz, 1976, pp. 12-27
- W. Hartmann, 'Zu einigen Problemen der karolingischen Konzilsgeschichte', *Annuario historiae conciliorum* 9, 1977, pp. 6-28
- Idem, 'Laien auf Synoden der Karolingerzeit', *Annuario historiae conciliorum* 10, 1978, pp. 249-269
- Idem, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, Paderborn – München – Wien – Zürich, 1989
- Idem, *Ludwig der Deutsche*, Darmstadt, 2002
- Idem (ed.), *Ludwig der Deutsche und seine Zeit*, Darmstadt, 2004
- W. Hechberger, *Adel im fränkisch-deutschen Mittelalter. Zur Anatomie eines Forschungsproblems*, Ostfildern, 2005
- E-D. Hehl, 'Die Synoden des ostfränkisch-deutschen und des westfränkischen Reichs im 10. Jahrhundert. Karolingische Traditionen und Neuansätze', W. Hartmann (ed.), *Recht und Gericht in Kirche und Welt um 900*, Oldenbourg, 2007, pp. 125-150

- M. Innes, 'Charlemagne's government', J. Story (ed.), *Charlemagne. Empire and society*, Manchester and New York, 2005, pp. 71-90
- Idem, *Introduction to early medieval western europe, 300-900. The sword, the plough and the book*, London and New York, 2007
- P. D. King, *Charlemagne*, Lancaster, 1987
- W. Levison and H. Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger I*, Weimar, 1952
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger II*, Weimar, 1953
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger III*, Weimar, 1957
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger IV*, Weimar, 1963
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger V*, Weimar, 1973
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger VI*, Weimar, 1990
- A. Lhotsky, *Quellenkunde zur mittelalterlichen Geschichte Österreichs*, Wien, 1963
- S. MacLean, *Kingship and Politics in the Late Ninth Century: Charles the Fat and the End of the Carolingian Empire*, Cambridge, 2003
- R. McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms. 789-895*, London, 1977
- Eadem, *The Frankish kingdoms under the Carolingians*, London & New York, 1983
- Eadem, 'Zur Herstellung von Kapitularien: Die Arbeit des Leges-Skriptoriums', *Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung 101*, 1993
- Eadem (ed.), *CAROLINGIAN CULTURE: emulation and innovation*, Cambridge, 1994
- Eadem, *Charlemagne. The Formation of a European Identity*, Cambridge – New York – Melbourne – Madrid – Cape Town – Singapore – São Paulo – Delhi, 2008
- H. Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta. Überlieferung und Traditionszusammenhang der fränkischen Herrschererlasse (MGH. Hilfsmittel 15)*, München, 1995
- Idem, *Studien zur fränkischen Herrschergesetzgebung. Aufsätze über Kapitularien und Kapitulariensammlungen ausgewählt zum 60. Geburtstag*, Frankfurt am Main – Berlin – Bern – Bruxelles – New York – Oxford – Wien, 2000
- Idem, 'Karls des Großen zweites Kapitular von Herstal und die Hungersnot der Jahre 778/779', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters 61*, 2005, pp. 1-52
- J. Nelson, *Politics and Ritual in Early Medieval Europa*, London, 1986
- Eadem, *The Annales of St-Bertin*, Manchester and New York, 1991
- Eadem, *Charles the Bald*, London, 1992
- Eadem, *The Frankish World 750-900*, London and Rio Grande, 1996

- Eadem, 'The voice of Charlemagne', R. Gameson and H. Leyser (eds.), *Belief and culture in the middle ages*, Oxford – New York, 2001, pp. 76-88
- S. Patzold, 'Normen im Buch: Überlegungen zu Geltungsansprüchen so genannter Kapitularien', *Frühmittelalterliche Studien* 41, 2007, pp. 331-350
- Idem, 'Die Bischöfe im karolingischen Staat. Praktisches Wissen über die politische Ordnung im Frankenreich des 9. Jahrhunderts', S. Airlie, W. Pohl and H. Reimitz (eds.) *Staat im frühen Mittelalter*, Wien, 2006, pp. 133-162
- Idem, *Episcopus. Wissen über Bischöfe im Frankenreich des späten 8. bis frühen 10. Jahrhunderts*,
- Idem, 'Bischöfe als Träger der politischen Ordnung des Frankenreichs im 9./10. Jahrhundert', W. Pohl et. al (eds.), *Der frühmittelalterliche Staat-Europäische Perspektiven*, Wien, 2009, pp. 255-268
- R. Pokorny, 'Ein unbekannter Synodalsermo Arnos von Salzburg', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 39, 1983, pp.379-394
- Idem, 'Eine Brief-Instruktion aus dem Hofkreis Karls des Großen an einen geistlichen Missus', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 52-1, 1996
- C. Pössel, 'Authors and recipients of Carolingian capitularies. 779-829', R. Crradini, R. Meens, C. Pössel and P. Shaw (eds.), *Texts and Identities in the early middle ages*, Wien, 2006, pp. 253-274
- T. Reuter, *The Annals of Fulda*, Manchester and New York, 1992
- Idem, 'Assembly Politics in Western Europe', P. Linehan and J. L. Nelson (eds.), *The Medieval World*, London, 2001, pp. 432-450
- C. van Rhijn, *Shepherds of the Lord, priests and episcopal statutes in the Carolingian period*, Proefschrift Universiteit Utrecht, 2003
- G. Schmitz, 'Ansegis und Regino. Die Rezeption der Kapitularien in den Libri duo de synodalibus causis', *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte* 105, 1988, pp. 95-132
- Idem, 'Die Reformkonzilien von 813 und die Sammlung des Benedictus Levita', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 56, 2000, pp. 1-31
- R. Schneider, 'Zur rechtlichen Bedeutung der Kapitularientexte', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 23, 1967, pp. 273-294
- J. Semmler, 'Zur Überlieferung der monastischen Gesetzgebung Ludwigs des Frommen', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 16, 1960, pp. 309-388
- Idem, 'Die Beschlüsse des Aachener Konzils im Jahre 816', *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 74, 1963, pp. 15-82
- Idem, 'Administration und Schriftlichkeit im Dienste der Reform', R. Schieffer (ed.), *Schriftkultur und Reichsverwaltung unter den Karolingern*, Opladen, 1996, pp. 67-84
- E. Seyfarth, *Fränkische Reichsversammlungen unter Karl dem Großen und Ludwig dem Frommen*, Leipzig, 1910
- H. Weber, *Die Reichsversammlungen im ostfränkischen Reich. 840-918. Eine entwicklungsgeschichtliche Untersuchung vom karolingischen Großreich zum deutschen Reich*, Würzburg, 1962

I. Woll, *Untersuchungen zu Überlieferung und Eigenart der merowingischen Kapitularien*,
Frankfurt am Main, 1995

H. Zielinski (ed.), *Die Regesten des Regnum Italiae und der burgundischen Regna, I*, Köln
-Weimar - Wien, 1991

邦語論文

- 五十嵐修「国王巡察使とフランクの国制」、『歴史学研究』第586号、1988年、pp. 101-110
大久保泰甫「カピトゥラリアの法的性格」1-4、『法学協会雑誌』第81号-4、pp. 309-372；
第85号-5、pp. 701-737；第85号-11、pp. 1503-1546；第85号-12、pp. 1617-1674 (1965-8
年)
加納修「メロヴィング期にカピトゥラリアはあったのか —フランク時代の国王命令と文
書類型—」、『歴史学研究』795、2004年、pp. 32-43
河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis)(七八九年)の試
訳」、『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所年報』第27号、2005年、pp.
117-150
同「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis)(七八九年)の注解(1)」、『福
岡大学人文論叢』第36号-4、2005年、pp. 1-23
多田哲「カロリング王権と民衆教化 —『一般訓令』(789年)の成立事情を手掛かりに—」、
『西洋史学』第178号、1995年、pp. 45-58
西川洋一「初期中世ヨーロッパの法の性格に関する覚書」、『北大法学論集』41(5-6)、1991
年、pp. 29-121
拙論「カロリング期教会改革のバイエルンにおける展開 —ザルツブルク大司教アルノ
(785[798]-821)の時代を中心に—」、『西洋史研究』新輯第34号、pp. 77-109
同「ルートヴィヒドイツ人王時代における集会の果たす役割について」、『歴史』第110輯、
2008年、pp. 1-25
同「カロリング期フランク王国における王国集会・教会会議 —ピピン期・シャルルマーニ
ュ期を中心に—」、『ヨーロッパ文化史研究』11、2010年、pp. 131-180